

2. 自律訓練法によって引き起こされた末梢皮膚温度の変化と唾液中生化学成分および心理指標について

大井 和美

〔目的〕唾液中 5-HT 濃度は、最近では神経性大食症患者で高いことや (Takahashi, 2005), 温泉浴後に有意に増加しているという報告があり (下村ら, 2004), 唾液中 5-HT は何らかの刺激性と対応していることが示唆されている。また, 体温調節にも関与することが示唆されている (Hori, Harada, 1976)。そこで, 本研究では, 自律訓練法によって引き起こされた末梢皮膚温度の変化に対し, 唾液中 5-HT, コルチゾール濃度の変化と心理指標の関連性について客観的に検討することを目的とした。

〔方法〕自律訓練施行群として, 60 名 (男性 28 名, 女性 32 名, 平均年齢 20.3 歳) に対し, BDI, EAT-26 を施行し, うつ状態と食行動の異常の有無を把握した。自律訓練施行前後に末梢皮膚温度の測定と唾液中 5-HT, コルチゾール濃度を測定した。一方, 自律訓練非施行群 10 名 (男性 5 名, 女性 5 名, 平均年齢 21.1 歳) に対しては, 通常の状態を経時的に末梢皮膚温度の変化の測定を行い, 唾液中アミラーゼを測定した。

〔結果〕BDI の男性の平均値は 16.3 点で中等度うつ状態を示しており, 女性の平均値は 11.0 点で軽度うつ状態を示し, 有意に男性で高得点であった。EAT は, 男女共に食行動の異常度が低いことを示していた。自律訓練後の末梢皮膚温度の変化については, 男性で平均 0.9℃の上昇がみられ, 女性では平均 0.6℃の上昇がみられた。自律訓練前の男性の唾液中 5-HT 濃度は 122.78pg/ml (± 214.93pg/ml) であり, 自律訓練後は 93.47pg/ml (± 84.93pg/ml) であった。女性では自律訓練前の唾液中 5-HT 濃度は, 138.04pg/ml (± 155.0pg/ml) であり, 自律訓練後は 186.49pg/ml (± 149.62pg/ml) で有意性が認められた。自律訓練前の男性の唾液中コルチゾール濃度は 7.19ng/ml (± 3.22ng/ml) であり, 自律訓練後は 8.94ng/ml (± 4.63ng/ml) で有意性が

認められた。女性では, 自律訓練前の唾液中コルチゾール濃度は 7.89ng/ml (± 6.42ng/ml) であり, 自律訓練後は 8.68ng/ml (± 5.91ng/ml) で有意性は認められなかった。

〔考察〕ラットの研究で 5-HT の働きを遮断するリセルギン酸ジエチルアミド (LSD) を静脈内に投与すると, 体温が上昇することが報告されており, これは中脳縫線部温度受容細胞のうち, 5-HT ニューロンの性質を持ったニューロンの働きを抑制することによって体温が上昇するものと推測されている (中山, 1981)。BDI 得点の高い男性が女性より温度の上昇がみられた。また, 唾液中 5-HT 濃度が下降傾向でコルチゾール濃度は上昇していた。この結果から, これまで自律訓練後に末梢皮膚温度の上昇する機序として, 血流量の増加がいわれているが, 今回の検討では, それに加えて 5-HT システムの関与も示唆された。自律訓練非施行群では, 自律訓練施行群との比較検討はできなかった。しかし, 自律訓練非施行群の末梢皮膚温度の変化が 0℃以下の場合, 唾液中アミラーゼ濃度の変化も見られず値も低かった。このことから, 唾液中アミラーゼのストレス指標としての有用性も示唆された。

引用文献

Takahashi, N., Hamaue, H., Kuronuma, N., Yoshihara, T., Ando, S., Hirafuji, M., Senjo, M., Parvez, S. H., & Minami, M. (2005). Salivary concentration of 5-hydroxyptamine in patients with bulimia nervosa. *Advances in neuro regulation and Neuroprotection*, 401-408.

3. 発達障害に対する障害意識の検討 —適切な心理教育プログラムを目指して—

乙井 有利

発達障害は, 1980 年以降に診断基準が明確化された子ども特有の精神医学的障害である。法的支援として, 発達障害者支援法が施行され, 支援体制が整いつつあり, 発達障害に対する認識が高まってきている。法的支援からも発達障害への支援が重要とされているが, 障害のある方の家族

や実際に支援に携わる方に対する支援はほとんど行われていないのが現状である。そこで、支援者に対する支援をより適切に行うために、発達障害の方への態度や発達障害に対する認識の構造について明らかにしておく必要があるのではないだろうか。そこで本研究では、このような障害のある方に対しての態度や障害についての認識の仕方、障害についての考え方を“障害意識”と定義し、認識的側面である障害者観と態度・行動的側面である障害者に対する自己効力感の二つに分けて調べ、障害意識に影響を及ぼすと考えられる要因を明らかにし、適切な心理教育プログラムの作成を目指すものとする。

【調査対象者】北海道S市にある国立大学、私立大学生に対して調査用紙を配布、倫理的配慮を説明し、研究主旨に同意していただける方に記入してもらった。配布数304部、回収221部で回収率は73%である。有効データは207であった。平均年齢21.66歳(SD=2.81)、男性91名(44%)、女性116名(56%)、現在の教育的背景は心理学、福祉学、教育学、その他である。

【調査内容】発達障害(知的障害(精神遅滞)、自閉症)に対する障害意識と障害に対する関心の程度、接した経験の程度、性差、自己肯定意識との関連を調べた。

【結果】①発達障害に対する関心：発達障害に対する関心は障害意識に影響しなかった。これは、発達障害が犯罪と関連しているというマス・メディアの報道などの影響を受け、必ずしも発達障害への関心が肯定的な障害意識に結びつかないことが背景となっている可能性が考えられる。また、発達障害に関して積極的に学ぼうとする機会が少ないことが考えられる。②発達障害の方と接した

【経験】発達障害の方とボランティア活動程度での障害者と接した経験では、障害意識に対する発達障害の方と接した経験の影響は、本研究の結果からは見出すことができず、接した経験の期間や内容が影響すると考えられる。③自己肯定意識：自己肯定意識が障害意識に影響を及ぼしていたのは、唯一自閉症における障害条件であり、自閉症

に対しては、自己肯定意識が高ければ、自閉症の方と接した場面でより積極的な態度をとるということが考えられる。④性差：男性の方が女性と比較し障害意識が高いという結果から、男性の方がより発達障害についての態度形成や認識が肯定的であると考えられる。

【考察】以上の結果から、心理教育を行う際には個人の心理的状況(自己肯定意識)に焦点を当てることが重要であろう。また、障害児・者支援において障害のある方のみに関わるのではなく、その方を取り巻く対人的環境にも視野を広げていく必要がある。たとえば、臨床心理士がスクールカウンセラーとして学校現場で活躍する際にも、心理教育を取り入れ、一人ひとりの子どもの心理的成長を促すような取り組みが行われなくてはならない。

河内清彦(2004). 障害学生との交流に関する健全大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響 教育心理学研究, 52, 437-447.

4. 保育現場における「気になる」子どもに関する生態学的視点からの検討

角田 純

【目的】近年、保育現場で保育者から「気になる」ととらえられる子どもが増加しているといわれ、「気になる子ども」の保育をどのように進めるかが問題となっている。「気になる子ども」という表現は、保育者の主観的な子どもの理解・評価・判断の仕方であると考えられる。従って、保育者の保育に対する価値観や考え方が異なると、「気になる」と判断する特徴が異なることが考えられる。しかしながら、本邦では保育者の要因を考慮した研究が少ない。さらに、報告されている「気になる子ども」の特徴は様々であるために、「気になる子ども」の概念は非常に複雑である。「気になる子ども」の保育や保育者支援を考えるためには、保育者に「気になる」ととらえられる特徴を明らかにする必要があると思われる。そこで本研究では、生態学的・相互作用的人間発達理論に